

【緑地を楽しむ本】

『「植物」をやめた植物たち』

末次健司 文・写真 福音館書店



表紙の写真もそうですがページをめくると色鮮やかな不思議な形をしたモノたちが現れます。キノコのようにもあり、イソギンチャクのようにもあり……。でも実はこれらは光合成をやめた植物たち。光合成をする必要がないので、緑色である必要もないということなのです。

ふつうの植物は土の中に根を張っていて、その根にキノコやカビの菌糸が入り込んでおり、それが土の中から窒素、リン、カリウムなどの肥料成分や水を集めて植物に提供している。そして植物はお返しに光合成でつ

くったでんぷんや糖分をあげている、という関係にあるといいます。ところが、光合成をやめた植物たちは、でんぷんや糖分を与えないどころかキノコやカビの菌糸を消化して自分の栄養にしているというのです。光合成を行う植物が菌類に報酬としてあげるでんぷんや糖分は、光合成でつくったすべての養分の2割にもなり、光合成をやめて菌類に寄生するようになった植物は、この高い報酬を避けるように進化したというわけです。

でも植物ですから、受粉し、果実もできる、タネも運ばせたい……。読んでいくと『植物』って何？』という「？」が頭の中に渦巻くと思います。

(遠藤)